

## わが如きもの、わが如くして過ぬべき

—近代女性文学と語る欲望(2)・樋口一葉—

中川成美

明治二十八年(一八九五)四月ごろ、樋口一葉は「さをのしつ」と表題された綴り帳に、こんな言葉を書き散らした。

たゞいさゝか六つなゝつのおさなだちより誰つたゆるとも覚えず心にうつりたるものゝ折々にかたちをあらはして、かくはかなき文字沙たにはなりつ。人見なば、すねものなどことやうの名をや得たりけん。人はわれを恋にやぶれたる身とや思ふ。あはれさるやさしき心の人々に涙をそゞぐ我れぞかし、このかすかなる身をさゝげて誠をあらはさんとおもふ人もなし。さらば我一代を何がための犠牲などことゞ敷とふ人もあらん。花は散時あり、月はかくるゝ時あり。わが如きもの、わが如くして過ぬべき一生なるに、はかなきすねものゝ呼名をかして

うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ことよな。

〔樋口一葉全集〕第三卷(下)、七七六頁、筑摩書房、一九七八年)

徐々に文名が上がり、明治の清少納言とか女西鶴とか誉めそやす世評の一方に、その実生活が寂しいものに思えてならなかった馬場孤蝶は、気のおけない姉にでも語りかけるように戯れ歌を一葉に贈った。

これさ姉さんすねチャア野暮だ、まだ二葉なるこなさんの、一葉に秋を知りなんす、御発心とは何がたね、柳の糸のむすほれぬ、縁もうすきかた思、人に云はれぬ御苦労か、笑ひ給ふも何とやら、凄きしらべもこもるなり、せめては春の夕ぐれに、散り行く花の木の下に、聞きたや君が胸の乱を。

〔樋口悦編〕『一葉に与へた手紙』所収、一二二、明治二十八年三月十五日付書簡、今日の問題社、一九四三年)

一葉はこの手紙に当意即妙な返事を返したものの、孤蝶の「すねチャア」が引つかかかってならなかった。まだまだ人生の春にあるのに、斜に構えて世を拗ねていけないよという孤蝶の問いかけは、直接には一葉へ恋愛を勧めているのであろう。関礼子はこのやりとりを孤蝶の「包容力」に包まれた一葉が「書きながら愉しくなるような言葉のコミュニケーションの場」(『姉の力』、筑摩書房、一九九三年)を持ったと解釈している。しかし、この往復書簡のあと、あるいは最中に一葉は何故、孤蝶から命名された「すねもの」に鋭く、激しく反応したのであろうか。勿論、孤蝶に悪意はない。また、親しい者同士の、それも文学を通じた関係のなかで繰り広げられる言葉の応酬が、一種のフィクション性をもった遊戯として機能することに一葉が通じていなかったわけがない。それでもなお、一葉に拘泥させるものが、孤蝶の軽口のなかにあつたとしか思えないほどに、「さをのしつく」に示された一葉の反発は強いものであつた。

皮相的にみれば一葉が実際の片思いをしていて、それを見破られたことにうろたえて言い訳したと見るのがわかりやすいであろう。しかし、「さをのしつく」は日記と作品との中間にあるような手元のメモであり、誰にも弁解する必要のない筆記媒体である。だからこそ、そこには濃密な自己の内部との対話が交わされていた。一葉が実際に孤蝶に与えた返事は、

女子には片恋はなきものと仰せられし君さまの御心に、さて

わが如きもの、わが如くして過ぬべき

はそれ程なさけあるものと御覧じつるか、真実真にお嬉しく候。言ひ解かん折はおのづから候はん。なみの濡衣と申さんも古ければ、

ひたすらにいとひははてじ名取川

なき名も恋のうちにざりける

(明治二十八年三月十七日付、馬場孤蝶宛書簡、『樋口一葉全集』第四卷(下)、八九一頁、筑摩書房、一九九四年)

と軽妙なものであり、「さをのしつく」の内省的なきまじめさは少しもない。一葉は明らかに孤蝶に自らの真情を隠蔽して、殊更に明るく振舞つたのであり、そこで解消されなかつた問題を「さをのしつく」という綴じ帳に語りかけたのである。

この一葉と孤蝶のデイスコミュニケーションは、男と女の根本的な齟齬というように一般化されがちである。孤蝶は女性としての一葉を意識しつつ、年若き友人としてごく通常の価値観に立脚して、恋愛や結婚という「幸せ」を彼女に願ひ、一葉はそうした「女性の幸せ」という押し付けに本能的に反発したとみる見方が、ここでの説明に容易になりうるであろう。または、孤蝶に無意識に働く男性中心的なジェンダー規範は、一葉という「もの書く女」を容認しないからこそ、一葉を「すねもの」として非難して恋愛市場に送り返すのだと、彼女が理解して反発したとする解釈も、ここでは妥当性を持ちそうである。これらの凡庸な分析を粉碎するのは次の「さをのしつく」の一節である。

わが如きもの、わが如くして過ぬべき一生

この一葉の自己認識、そしてそれを書くことよって得られる自己確認は、世間へのポーズや自己緘晦、ましてや自己嘲笑や自己卑下として解釈されることを拒否する。他者よって名づけられた「すねもの」という言葉は、その呼びかけによつて構成された主体が、「わが如きもの、わが如くして過ぬべき一生」と考える主体とは別のものだとすることを一葉は歌に託した。

うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

この世の中で偏屈に拗ねて暮らしていると呼ばれる人とは結婚をせずに伴侶や子供を持たない人のことを言うのであろうかという意のこの和歌が、女性規範に括り付けられることを拒否したものであるのは勿論だが、それだけではない。「私のような人間が、私のありようのまま生きていく人生」という概念がここでは明確に意識されて、だからこそ「すねもの」として排除されてしまふ不当性を主張して、そこに秩序立てられ慣習化された意識の構造をあぶりだしていくのである。彼女にとつて書くという行為は「わが如きもの」の実現と不可分に結ばれたものであり、「わが如く」するため必須の表現形態・パフォーマンスであつたこと

は、前掲の「さおのしつく」引用文の冒頭によつてわかる。六、七歳のころから「心にうつりたるもの」を誰に習つたのでもなく文字表現に託してきた一葉は、自らをそうした行為体（エージェンシー）としてアイデンティティを確認してきたのである。しかし、一方に一葉は、

よははかなくてをかしき物也。いさゝか筆に墨をぬりて白紙の上にそめいだけせば文といひ歌とよびおのが心にかなひたらばやがて非凡絶倫などたゞゆるぞかし。つくる人もとよりこゝろなしほむる物いかでながらんや。きのふの歌才は今日の平凡に成て見かへるものもなきこそ哀れなれ。凡眼いかで玉石をしるべき。わかち難きのまなこをもつてみだりに毀着のことばを出さば時に冠をくつにする事あり。このあいだにうまれて此詞に左右さるべき文士画客のをかしさよ。人の見るをこのまず世の聞を願はず静に思ひを筆墨の間にかまふるもの又いくたりかあらん。これありてはじめて天地しるべく人事うかゞふにたるべし。夜深くして月くらく、ともし火消えんとする破窓のもとにひとり思ひて猶急がきがたし。

（前出「さをのしつく」）

と述べているが、文学がただ自律的な主体の認識によつてのみ構成されているのではなく、読者・批評者という「他者」との相互的な認識行為のなかに可変的な生成を繰り返すものであることを

も理解していた。ただ、ここで重要なのは作品の価値評価が浮薄な流行によって決定されている状況を嘆くのが主眼ではなく、「世の聞を願はず静に思ひを筆墨の間にかまふる」という一節からもわかるように、作品を書くことが自己の内部に垂直に降りていくような行為性そのものの実行なのだ主張していることである。それは作家の制作態度へ対するモラルへの言及というよりは、もっと個人的な欲望・ニーズの問題として把握されていたことを想像させる。

清少納言や西鶴に擬せられる自己が、そう名づけられることで清少納言や西鶴という言語によって固定化される文脈、例えばそれは文学という場所であろうし、直接には原稿が売れる文学市場ということになるが、そうしたコンテクストに収奪されることへの違和がここでは表明されている。それは清少納言や西鶴を引用項とすることによって表象される文学という場所が、孤蝶が手放しに賞賛するような絶対的な価値として一葉には感知されなかつたということでもある。表面上においても、そんな盛名に反して一向に経済状態は良くならないし、賞賛にみあつた具体的な恩恵が降ってきたわけでもない。

しかし、そうしたことが主たる問題であつたのではなく、ここで彼女が言おうと試みるのは、まさしく名づけによって他者に奪還されるしかない自らの主体を、如何にして自分の身に繋ぎとめていくかという命題への答えであつただろう。一葉のこの真剣な内的葛藤は、必然として彼女をとりまく資本やジェンダーの不均

衡や歪みを剥ぎとつていくこととなる。

## ※

一葉日記には一八九四年（明治二十七年）四、五月から九五年（二十八年）四月までの空白部分がある。野口碩は日記の補注『樋口一葉全集』第三卷（上）、四一―頁）のなかで、おそらくは一葉自身が処分したのであろうという『一葉に与えた手紙』（前出）手紙番号二〇七の校訂者の意見を紹介しながら、「久佐賀義孝や村上浪六との交渉の経過の最も不明な部分が空白になっている」こと、また「更に注意をひくことには、二十七年七月末以後二十八年四月までの空白が、日清戦争の期間に相当」していることを指摘している。日清戦争が明治近代における「国民」という主体概念の確立を促したことは、その戦後補償問題、すなわち日清講和条約調印直後の三国干渉における勅告が国民世論の沸騰を呼び、その受諾を屈辱として、西欧の帝国主義と同等の日本帝国主義の樹立を目指させていったことから了解されよう。帝国主義的「発展段階」の発せとなつたのは、日清戦後経営として次々に打ち出された政府主導の急速な軍備拡張と資本主義整備、また教育体系の再編、植民地経営などであつた。陸軍は七個師団から倍の十四個師団に、八幡製鉄所の建設（一八九七年）、高等専門学校や女学校など中等教育以上の教育機関の拡張、台湾総督府の設置（一八九五年）など、清国からの賠償金三億円を基礎に営業税、

葉タバコ専売実施などの新税導入と増税、また公債募集などの財源によって、実施されていった。一八九七年（明治三十年）の国家歳出予算は二億四七五〇万円、内軍事費は一億三八五六万円にのぼり、歳入予算一億三六二六万円を上回った。日清戦後の急速な近代化は、こうした無理な軍備拡張を基盤に促進され、階級間格差は広がり、貧富の差は大きな社会問題となっていた。

一葉が日清戦時下の日記を自ら破棄したのではないかという憶測は、当時金を借りることを目的に近づいた久佐賀義孝、村上浪六との交渉の痕跡を消したからだという理由から導き出されている。久佐賀は天啓顕真術会という怪しげな組織を作って会員募集した占師であり、村上は当時東京朝日新聞の小説記者としていわゆる撥鬻小説という娯楽読み物や、日清戦争実録である『征清軍記』（青木嵩山堂、明治二十七年十二月刊）を書いていた。

接点を持たないこの二人を結ぶのは、投機家・相場師という別の顔である。近代資本制度の推進によって誕生した相場は、米、株式を筆頭にあらゆるモノを投機の対象として物象化したのである。一八九四年（明治二十七年）八月に始まった日清戦争はこれを白熱化させる。投機家にとっては千載一遇の好機であった。

米相場（実際に取引される米を対象とした正米相場）を例にとれば、一八九四年三月、一石七〇九三円であったのが、七月には九二三八円、十一月には一万〇二二四円にまで高騰している。しかも、前述したような戦後政策のなかで、九五年四月の講和条約締結時に八七九〇円で落ち着いた米価が十月には九四二三円、翌年

十月には一万五三四円となつて、市井の民衆の生活を圧迫した。久佐賀、村上が小金を持っていたのは、この時期を逃さずうまく立ち回ったからである。

一葉は講和条約に興奮する世情のなかで久佐賀に六〇円の無心をする（「水の上日記」明治二十八年四月二十日の項）。また、村上のもとにも昨年来頼んでいた借金の催促をしている（同五月一日の項）。「たけくらべ」の連載、「ゆく雲」、「軒もる月」の執筆と旺盛な意欲を示しながら、五月初頭一葉は経済的につつもさつともいなくなつていった。そんななか、西村劍之助が五月八日に相場にはずれて刀剣と西郷南州の軸を持参して五〇円ぐらいで質入してくれと頼みに来た（「水の上につ記」）。これは二十二日（「ミつのうへ」）に相場が好転していい結果になったと西村が来訪して解決した。西村は感謝のしるしと一同にうなぎを著った。一葉はその日のことをこう書いている。「今日は西村の吉報をきく。家は貧たゞ迫りに迫れど、こゝろは春の海の如し」（「ミつのうへ」、明治二十八年五月二十二日）。久佐賀や村上には持ち得ない感情を、一葉は素直に吐露している。

投機に走る久佐賀や村上がもし失敗したとしても同情など示はしないだろうに、稲葉家の縁につながる西村の苦境には真実心を痛め、冷徹にはふるまえない。それは縁の遠近だけで決定されているのではなく、日清戦時、戦後の構造的な社会矛盾が、一葉の間近にも押し寄せてきていることに気づいたからである。西村のようなごく近い人間たちが否応なしに巻き込まれていく残酷な

近代資本の触手に、無縁のままに過ごすことは出来ない。一葉はその構造の最も底辺を担い、なおその構造によって外縁化されるしかないことの不当性を「わが如きもの、わが如くして過ぬべき」という言葉に託したのではなかったのだろうか。私という主体を、自らが認知する主体のままでは置いてくれないような社会の偏頗な配分に一葉は反発する。

一葉を貧困というコードで分析することは、社会経済構造の基底をなす権力の配置を考えなければならぬ。従来、一葉はそうした権力への覚醒が希薄であつたとされてきた。むしろ、小状況における既存の価値基準に寄り添う形で、その文学活動を成就したとみる見方が一般的である（例えば博文館との結びつきによって、『文学界』から離れていったことなどを、思想の前に金が必要であつたから仕方が無かつたなどといった説明で処理してしまうようなことが、一葉理解には往々に見られる）。『日清戦争実記』で資本を蓄えた博文館が、総合雑誌の嚆矢『太陽』をもって明治言論のオピニオン・リーダーとして参入するのは、一八九五年（明治二十八年）一月である。社主大橋佐平の女婿大橋乙羽からの要請で『文芸倶楽部』、『太陽』という博文館ジャーナリズムに参画した一葉は、名前の上では政治家や学者、男性作家たちと肩を並べ、視覚的に権力の構図を体験するようになった。「ゆく雲」を掲載した『太陽』第一巻第五号（一八九五年五月五日）を例にとれば、口絵が小松宮、閑院宮、松方正義、論説欄に三宅雪嶺、久米邦武、植村正久、講演が金子賢太郎、その他外山正一、幸田露伴、

依田学海、佐々木信綱、泉鏡花が一つの雑誌の目次にひしめいたのである。女性は一葉と、家庭欄の「くりや女」のみであった。名前が自己の身体を超えて浮遊するような感覚を、一葉は「水のうへ日記」明治二十八年十月の項に「おそろしき世の波かぜにこれより我身のたゞよはんなれや。おもふもかなしきはやうくをさな子のさかいはなれて争ひしげき世に交る成けり。」と記している。

一葉の言語表現にはよくこのように水のメタファーを用いて、その浮遊感を表出しているが、よるべない孤立感をそこに表しながら、一方にはその感じを自分の独自の主体感覚として提出しようとしている。何も知らない子供であつた時代を懐かしみながら、社会化した主体として独立したことを宣言しているかのようなこの言葉は、社会に布置された権力の見取り図について学習した例証となろう。だが、名づけによって自己主体が喪失されてしまうのではないかという彼女のトラウマのように再起する恐れは、もはや後戻りは出来ないとわかつていても、何度も頭をもたげてくる。一葉の最も著名な嘆慨である「たけくらべ」脱稿直後の日記の一節は、そうした逡巡を統合する役割を果たしている。

みたりける夢の中にはおもふ事こゝろのまゝにいひもしつ。  
おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば又もやうつせみのわれにかへりて、いふまじき事、かたりがたき次第などさまゝぞ有る。

しばし文机に類づえつきておもへば、誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとて、そはなすべき事は。

われに風月のおもひ有やいなやをしらず。塵の世をすて、深山にはしらんころあるにもあらず。さるを厭世家とゆびさす人あり。そは何のゆゑならん。(中略)かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきをおもへばあやしう一人この世に生れし心地ぞする。我れは女なり。いかにおもへることありともそは世に行ふべき事かあらぬか。

(「ミ」の上)、明治二十九年二月二十日の項、『樋口一葉全集』第三卷(上)所収)

自己主体を確立し何の障碍もなく自己実現する夢のなかの「我」と、そうではない現実の「我」との逡巡は、「誠に我は女成りけるものを」という母体を得て統合される。それは絶対的な孤絶の中にしか、在ることは可能ではない。勝本清一郎は、この箇所を「一葉にとって世の中はどのように女の力に及ばない不如意の世の中であった。あらゆる世俗的な、主として男の、力関係で雁字がらめにされている世の中の荒浪のあいだで、女の一葉は何度もうめき声を発し、遂に厭世の「甘味」にさそわれた。」(「一葉・われは女なりけるものを」、『近代文学ノート2』所収、みすず書房、一九七九年)と解釈した。確かにこの暗い嘆きは、博文館によって押し出された場所が、男性論理に動かされているのだとい

うことへの気づきとして受け取れる。張り巡らされた権力の機構は男性のものであって、一葉が介入する隙間などどこにもない。だが、ここにはそれを梃子に、自己の主体がどこにも奪還されない確かな指標としての「女性」を発見した一葉の姿が見出される。ジェンダーによって分断された不平等を転倒させ、権力の支配・分配原理から独立した場所として「女性」を認識したのである。それは「すねもの」、「厭世家」の意味内容の価値転倒でもある。そして、なおそれはセクシュアリティの抛りどころとされているような通俗的な男性視点で構築された「女性」とは別の地平に置かれている、極めて純化した具体的な身体を指している。

一葉に語る欲望が充溢していたことは明らかだ。しかし、作品、和歌、日記などを書くことによってそれが解消されたと見るのは間違ひであろう。一葉は語れない苦しみを内省的に訴える。「ものつつみの君」と呼ばれた少女のころから、彼女の語る欲望は常に満たされなかつた。満たされない渇きを知りもしないで、孤蝶は彼女を「すねもの」とからかつた。呼びかけられたり、名づけられたりするたびに一葉の内部に去来する違和感は、おそらくは彼女のなかに夢の中に見るような語りの欲望を遺憾なく満足させる理想の「我」があつたからであろう。だが、作品を書き、発表するステップのなかで感知された社会矛盾の諸相は、一葉に、その可能性を学習させた。それは落胆する経験でありながら、一方に欲望が十全に満たされる地点などないのだという了解をさせたのだ。

「すねもの」という孤蝶の呼びかけに生起した一葉の主体を求める放浪はこうして現実の一葉の身体に位置づけられた。ジュディ・パトラーは『触発する言葉』Excitable Speech (Routledge, 1997) でこう述べている。

もしも言語が身体を支えているなら、言語が身体が存在を脅威にさらすこともありえる。つまり、言語が暴力をふるう可能性は、すべての語る存在が、呼びかけによってひとを構築する《他者》からの呼び声に根本的に依存していることに深くかかわるものである。

(竹村和子訳、『思想』一九九八年一〇月)

悪意がなかったにも関わらず孤蝶が呼びかけた「すねもの」という言葉に、一葉は侮蔑されたと感じ、深く拘った。この出発が、語る欲望が禁止されると感じ、自己主体の喪失に不満・不安を募らせる一葉自身の内的意識を浮かび上がらせていった。パトラーが指摘するように、一葉が孤蝶の呼びかけに根本的に依存しているからこそ、一葉はその言葉に鋭く反応したのだ。そして、その言葉を外在化させながら、社会的なコンテキストに置き直した。そこで見出されたのは、本当の「私」でも、何も無い「私」でもない。

語りの主体として認知してきた自己が、実は重層的に構築された諸条件によって可変的に存在し、その存在のあり方が自己主体

なのだということに気づいた一葉が、自己の語る欲望の発話への拘りを捨て、自己実現の場所としての「女性」、つまり自己身体を発見していく。それはまさしくずっと求め続けた「わが如きもの、わが如くして過ぬべき」ための、もつとも確かな場所を獲得したのである。「われは女成けるものを」は、ジェンダーの嘆きから出でながら、確固たる内的世界へと、言語的な制約を超えて探索する意思を表明する、一葉の独立宣言でもあったのだ。

付記 『樋口一葉全集』からの引用は、一部句読点、濁点を補って表記した。

(ながわ・しげみ 本学教授)